

二〇二四年度 一般選抜 学力検査(国語)

国語総合 (近代以降の文章) ・ 現代文B

解答番号

1

〜

28

一 次の文章を読んで、後の問い（問1～問9）に答えなさい。

音楽の効用といえば、「モーツァルト効果」という言葉を思い出す人も多いだろう。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの生誕二百五十年にあたる二〇〇六年は、ヨーロッパを中心とした各国で祭典が行われ、モーツァルトの音楽が改めて評価された一年でもあった。

「モーツァルト効果」の発見は、心理学の分野でなされた「モーツァルトの音楽を聴かせた学生は、知能検査で高い成績を示した」という報告によるものである。一九九三年、イギリスの科学雑誌「ネイチャー」に掲載されたこの発表を巡って論争が起こり、決着をみないまま現在も議論が続けられている。とはいえ「モーツァルト効果」という言葉自体は、アメリカの音楽研究家によってシヨウヒヨウ登録（ア）もされ、音楽療法の一つとして定着した感がある。

私自身は、「モーツァルト・モード」と個人的に呼んでいる感覚がある。気持ちが朗らかになり、まるで木漏れ日が自分の頭の上でダンスを踊っているかのような気分が周囲の人たちと明るく話せる。発想が空気のなかを疾走するようにどんどん湧いてくる。生きていてよかったと思える、絶好調の時の流れ。それはモーツァルトの音楽を聴いている時の感覚と非常に似ている。だから、⁽¹⁾「モーツァルト効果」も理解できなくはない。

ただ、人間の脳は高度に複雑なものである。断定できることが非常に限られる分野が脳科学だともいえる。

そんな折、「ネイチャー」に再び興味を惹かれる論文が掲載された。それは、『喜ばしい高揚』というものによって、モーツァルト効果は説明できる」というものだった。これはモーツァルトの音楽を「楽しむ」ことによって、気分が高まるということである。要するに、モーツァルトの音楽が好きでなければ、その効果は全く期待できないのだ。つまり、ロックでもジャズでも、自分の好きな音楽を聴いている時の精神はともいいう状態にあるということになる。

好きな音楽を聴くと快いというのは、考えてみればごく自然なことだが、ここで注目したいのは、主体の能動性ということだ

ある。

自ら作る「喜び」や「楽しむ」という姿勢が脳を活性化させ、〈生〉への取り組みを前向きなものにしてくれるというこの報告は、脳科学で証明されていることとも一致する。fMRI（機能的磁気共鳴映像法）を用いた実験により、音楽を楽しんでいる時に活性化する脳内のニューロンは、人間が生きるために必要な欲動（注1）をつかさどる部分と等しいことが判明しているからである。つまり、「モーツァルト効果」の本質は、モーツァルトの音楽そのものの中にあるのではなく、それを受け取り、喜びとする〈私〉の中にあるということだ。

ここでも私たちは、音楽の前で、自らの人生の **A** を試される存在なのである。

そうした中で、またしても新しい音楽体験があった。それは、一見すると「親しみやすいクラシック音楽祭」のイメージをまとって、私の前に現れた。

しかし実態は、単なる「初心者向けのお手軽クラシック入門」といったものではなかった。そこは、余計な能書きを必要としない本物の音楽が、むき出しの姿で人々を待ち受けている場であった。その音楽祭の名は、「ラ・フォル・ジュルネ」という。

「熱狂の日」という意味のこのイベントは、一九九五年にフランスの北西部の港町ナントで始まったのだという。日本に上陸したのは二〇〇五年。毎年ゴールデンウィークの時期に、東京国際フォーラムを中心として丸の内地区で開催される音楽祭の第一回目に、私はたまたま足を運んでいた。

会期中、二百を超えるプログラムが組まれている。一公演は一時間弱。入場料は千円札一、二枚ほど。一番高価な公演のS席でも、三千円だ。無料公演も多い。小さな子どもも観客として積極的に受け入れているが、変に「お子様向け」にアレンジされているような公演はない。

奏者は国内外の一流のアーティストたち。本物を出し（1）オし（4）み（1）なく提供し、恩着せがましい格付けなどもいっさいない。なにか特別な演出があるわけでもない。ただ、朝から晩まで、紛（1）う（1）かたなき「むき出しの音楽」が、絶え間なく鳴り響いていたのである。

る。丸の内に突如として出現した、学園祭のようだった。

祭には、偶然性がある。思いもかけない出会いがある。果たしてこの音楽祭で、私はすばらしい音楽に遭遇した。

二〇〇五年の「ラ・フォル・ジュルネ」は、「ベートーヴェン」をテーマに掲げられていた。私は、思いがけず交響曲第六番《田園》を聴いていた。

「思いがけず」というのは、当時の私が普段選ぶ曲に、《田園》はまず入ってこないからだ。正直なところ、今思い出しても、なぜ自分があの曲を聴いていたのかよくわからない。しかし、である。

「あれ？ 俺、《田園》を聴いちやってるよ……」

あの時音楽を聴きながら、感じ続けた

「《田園》って、こんな曲だったんだ」

曲が終わり、拍手をしながら、「いい体験をした」⁽³⁾。素直にそう思えたのである。

「ラ・フォル・ジュルネ」でむき出しの音楽に接したことで、私は、本来自分が持っていた生命力を回復したのかもしれない。なぜだろうか。

既知と思い込んでいた音楽が不意に目の前に全貌をさらしたことに對し、脳の中の神経細胞が自ら能動的にその音の世界に分け入り、未知の世界を見つけたのではないだろうか。

脳内の作用は、自発的な発見ほど、そのもたらす「喜び」の度合いは強くなる。自発的であればあるほど、〈私〉の生命がフル稼働するからだ。「なぜ、私はこの曲を聴いているのだろうか？」と、むしろわからないままに出会った《田園》は、これまで私の知っていた《田園》ではもはやなく、ベートーヴェンという一人の作曲家の手になり、後世まで残った、密度の高い音楽そのものの姿であったのだ。

ところで私は、自分の体が音楽に反響しているのを感じる時、自分の脳内を眺めているような気分になることがたまにある。⁽⁴⁾

そもそも脳の中の活動とは、一千億個のニューロンによる交響曲（シンフォニー）だといっている。（注2）畢竟、脳の働きとは、それぞれの知覚をつかさどるニューロンのどれが、どのタイミングでどのような形で動くか、ということだといえる。脳内の情報処理の形式は、「タイミングの制御が正確でなくてはいけない」という点まで、音楽表現が持つている特徴と似ている。そして、ニューロンは休まない。絶え間なく、常に瑞々しいハーモニーを奏で続けているのが、脳内における神経細胞群の働きなのである。

そう考えると、「天才」と呼ばれる人々は、いわば、脳の中で「いい音楽」が鳴り続けている人たちなのかもしれない。

音楽とは、生命の根源的世界を現実世界に再構築してくれている、いとも優しき存在だ。だから、音楽はその本質において、私たち一人ひとりの〈生〉へのメッセージとなり得る。音楽との出会いとは、既知のものにさえ未知の魅力を吹き込んでくれるような、常に生成の可能性に溢あふれた創造的なものなのである。

絵画、詩、小説……ありとあらゆる「芸術」がこの世には存在するが、音楽は、他の芸術とは一線を画するように感じられる。（5）最も生命原理に近い、生命哲学の根幹にかかわる、とでもいおうか。

実際、古代ギリシャ以来、音楽は、芸術論の中核だと認識されてきた。特にヨーロッパ文化においては、音楽を芸術の一ジャンルとしながらも、倫理や精神、さらには創造性の原点としてとらえる思想が、今日にも受け継がれている。

それは、「音楽」の語源にも象徴されている。英語でいえば、「music」（ミュージック）。これは、ギリシャ語の「musike（ムシケー）」から生まれた言葉であり、「ムーサの技」「ムーサがかさどるもの」という意味だ。

ムーサとは、「ミューズ」のギリシャ語名「ムーサイ」の単数形。すなわち、ギリシャ神話における人間の知的活動をつかさどる女神のことであり、「music」という言葉には、詩や舞踊といった美的行為も含まれていたことがわかる。

つまり、「music」という語それ自体は、知的表現と不可分な意味合いを持つ言葉であって、「音」という意味は持たない。

ここが、日本語で「音楽」という時に想起されるもの——リズムや音程といった、「music」と比べると

C

——との

違いかもしれない。芸術の神ミューズから直接降り立つもの。命にかかわるもの。古来、音楽を奏でること、音楽を聴くことは、生の本質であるとさえ考えられていたのである。

音というものを梯子^{はしご}にして地上に降り立った女神^{ミューズ}、すなわち「music」の抽象^(ウ)のビショウを、私は探し続けている。それを生み出すものは音だけではなく、思考や情動、生命の躍動とも呼ぶべきものではないだろうか。このように考える時、音楽は芸術の一形態を超えた存在として、私の前に顕^{あらわ}れてくる。

(茂木健一郎『すべては音楽から生まれる』による。)

(注1) 欲動——精神分析学の用語。人間を行動に駆り立てる心の動き。本能的なものと考えられる。

(注2) 畢竟——さまざまなきことがあるにせよ、最終的には。結局。

問1

傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、
1
2
3

(配点6点)

(ア) ショウヒョウ

1

- ① 祖父はメイショウと呼ばれる野球監督だ。
- ② 乾杯の声にショウワする。
- ③ 肺炎をハツショウする。
- ④ ギョウシヨウ人から野菜を買う。
- ⑤ 国家プロジェクトに多くのショウチヨウが関わる。

(イ) オしみなく

2

- ① 野球選手が海外にイセキする。
- ② 船のコウセキが水面に波を立てている。
- ③ セキシユンの思いを俳句にする。
- ④ 教師としてのシヨクセキを果たす。
- ⑤ この町にもはやセキジツの面影はない。

(ウ) ビシヨウ

3

- ① ヨビの椅子をいくつか持つていく。
- ② ビミヨウな調整が必要な機械だ。
- ③ 刑事が容疑者をビコウする。
- ④ ひどいビエンに悩まされる。
- ⑤ この作品は近代小説のハクビと言われている。

問2

空欄

A

〜

C

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①〜⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、

4

〜

6

。

(配点6点)

A

4

- ① 加速度
- ② 充実度
- ③ 好感度
- ④ 難易度
- ⑤ 緊急度

B

5

- ① 違和感
- ② 幸福感
- ③ 陶醉感
- ④ 絶望感
- ⑤ 孤独感

C

6

- ① 一般的で広汎なイメージ
- ② 視覚的で名画のイメージ
- ③ 神話的で崇高なイメージ
- ④ 限定的で狭義のイメージ
- ⑤ 娯楽的で軽薄なイメージ

問3

傍線部X・Yの語の文章中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、7・8。

(配点4点)

X 能書き

7

- ① 優れた点や魅力について書きたてた言葉
- ② 子どもに向けて易しく説き明かす言葉
- ③ 虚偽で飾りたてた芝居がかった言葉
- ④ 効能や聴き方について注意を促す言葉
- ⑤ 専門的な知識に基づいた難解な言葉

Y 紛うかたなき

8

- ① 気が休まるひまがないほど長く続いた
- ② 原形をとどめないほどアレンジされた
- ③ 見ていて悲しくなってしまうほど粗雑な
- ④ 他のものと間違いようがないほど確かな
- ⑤ 従来の物差しで評価できないほど斬新な

問4

傍線部(1)『モーツァルト効果』も理解できなくはない」とあるが、なぜ筆者はそのように述べるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

9。

(配点5点)

- ① 筆者が調べたところでは、アメリカでは「モーツァルト効果」が研究家によって証明され、音楽療法として定着しているから。
- ② 筆者が読んだ論文に、モーツァルトの音楽が好きでさえあれば、それを楽しむことで気分が高まることが記されているから。
- ③ 筆者自身も、モーツァルトの音楽を聴くことによって、生きていてよかったと思えるほど絶好調の気分になることがあるから。
- ④ 筆者が専門としている脳科学の分野においても、モーツァルトの音楽がもたらす効果については、明確に証明されているから。
- ⑤ 筆者にとって、モーツァルトの音楽を聴く時と、自分の調子がすこぶる良い時とで、感じる気分がほぼ同じであるから。

問5

傍線部②「一見すると『親しみやすいクラシック音楽祭』のイメージをまとって、私の前に現れた」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

10。

(配点6点)

- ① 二百を超える多数のプログラムの組み合わせが、誰でもその気になれば日程と内容を選んで聴きに行けるように配慮したものと思えた、ということ。
- ② ベートーヴェンの《田園》に代表されるように、一般に親しまれていて筆者にとってもなじみのある曲を演目を選ぶなどの工夫が施されていた、ということ。
- ③ 入場料も安く小さな子どもも受け入れていることから、初心者向けにわかりやすいアレンジを施した演奏会であるかのような印象を持った、ということ。
- ④ 「熱狂の日」というネーミングから、短い時間に観客が盛り上がるという一般的なクラシック音楽のイメージとはかけ離れた光景を想像した、ということ。
- ⑤ 特に格付けや演出が施されているわけではなく、一流の奏者による本物の音楽がむき出しの姿のまま提示されていることに感銘を受けた、ということ。

問6

傍線部③「『いい体験をした』。素直にそう思えたのである」とあるが、なぜ筆者はそうのように思えたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、11。

(配点6点)

- ① 聴いたこともなかった《田園》を初めて聴いてすぐに曲の実相に触れることができ、この名曲を聴く自分も高尚な世界に入ることができた、と感じたから。
- ② 飾り気のない本物の音楽として聴いた《田園》という曲について新鮮な発見があり、この曲と偶然のいい出会いを果たすことができた、と感じられたから。
- ③ これまで聴いてきたモーツァルトと異なり、ベートーヴェンの《田園》に全く不快さをおぼえる要因がなく、好んで聴くべき曲を新たに見つけられたから。
- ④ 一流のアーティストによって演奏された《田園》は、これまで聴いてきた《田園》とは別の曲のようにさえ思われ、格の違いを感じることができたから。
- ⑤ あまり《田園》に親しんでこなかった自分にも曲が理解しやすいよう演出された演奏を、格安の入場料で聴くことができたのは、幸運なことと思えたから。

問7

傍線部(4)「自分の体が音楽に反響しているのを感じる時、自分の脳内を眺めているような気分になることがたまにある」とあるが、なぜ筆者はそのように感じるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は、

12。

(配点5点)

- ① 脳内の多数のニューロンは制御されたタイミングで動くことを知っており、それが交響曲の奏でられるさまに似ていると感じるから。
- ② ベートーヴェンの《田園》を聴いて自分の生命がフル稼働したとき、ニューロンと音符とが一つ一つ対応していることを実感したから。
- ③ 知っているつもりだった楽曲を聴き未知の部分を見いだすとき、脳内で「喜び」が生成される過程を視覚的に確認することができるから。
- ④ 脳内の神経細胞群は絶え間なく働いているはずであり、それはあらゆる楽器が休むことなく音を出す交響曲の演奏と同じだと思うから。
- ⑤ 普通の人にはないような才能を持った人の脳の働きは、オーケストラが交響曲を演奏するときの様子と似ていることが実証されたから。

問8

傍線部(5)「音楽は、他の芸術とは一線を画するように感じられる」とあるが、なぜ筆者はそうに述べているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

13。

(配点6点)

- ① ヨーロッパでは伝統的に音楽は人間の知的活動をつかさどる中枢に位置づけられるものとして扱われており、芸術の一ジャンルであるという考え方はとられてこなかったから。
- ② ずばぬけた才能を持つ人は脳内で音楽を受けとめながら創作活動をしていたことが、音楽は人間の本質である倫理や創造性の原点だとする古代の考え方も一致するから。
- ③ 既知の曲であっても未知のものに出会ったような感動を与えてくれるのが音楽であり、他の芸術ジャンルである詩や舞踊ではそのような感動を得られることはないから。
- ④ 音楽の語源はギリシャ神話において人間の知的活動全般をつかさどる女神の名に由来しており、音を用いた芸術ジャンル全てを指す言葉であったことが明らかであるから。
- ⑤ 音楽は単なる芸術というより生命の根源的世界を体現したものだと感じられ、そのことは「音楽」の語源が知的表現全般をあらわす言葉であることにも裏づけられているから。

問9

本文の内容に合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

14。

(配点6点)

- ① 「モーツァルト効果」は筆者にも実感され「ネイチャー」の論文でも論じられたが、それに関する論争は現在も決着していない。
- ② 脳科学の実験によって判明したニューロンの活性化の仕方から、音楽が生命原理に近い芸術であると言える、と筆者は考えている。
- ③ 「ラ・フォル・ジュルネ」で《田園》の全貌を知るといふ新鮮な体験をした結果、筆者が《田園》を聴いた理由も明らかになった。
- ④ 筆者が「ラ・フォル・ジュルネ」で《田園》を聴いて喜びを得られたのは、神経細胞が能動的に働いたからだと考えられる。
- ⑤ 筆者は、単なる音ではなくミューズが地上に降り立ったかのような生の本質を感じることのできる音楽との出会いを望んでいる。

二 次の文章を読んで、後の問い（問1～問9）に答えなさい。

人は生きる上で、何かしらに価値を置かなければ生きていけない。生きる意味は、すべての人にとって不可欠である。多くの人にとって、最も根源的な価値とは「生命の維持」だろう。これは人間の本能の部分で、意識するかしないかにかかわらず、誰もが行っていることだ。この「生命の維持」には、食べ物を食べ、水を飲み、防寒のために着る物を得ることが必要だ。

生命を維持できた次の段階は、社会の中で生きる人としての在り方がより大きく分かれることになる。⁽¹⁾ここに、人間性が大きく表れることになる。生命の維持が比較的容易である現代においては、直接は生命の維持に必要な、嗜好品しこうひんや贅沢品ぜいたくひんにも価値を置く人が多くいる（この点については前近代においても同様の構造はある）。また手段であるはずの貨幣そのものに、より価値を置く人もいる。

その一方で、貨幣や嗜好品、贅沢品や、それらが織りなす華美な生活よりも「より良く生きる」ことに価値を見出す人も多いだろう。また家庭を持ち、子どもをもうけ、子の成長を見届けながら人生を全うすることに価値を見出す人も多い（個人的には、もちろんそれは素晴らしいことだと思う）。さらに社会貢献活動や奉仕活動、政治活動や社会変革に価値を置く人もいる。

A、価値をどこに置くかで、その人、個人の生き方が決まるといっても過言ではない。この価値については、社会と個人との相互作用の中でその意味が与えられることになる。なぜなら、生命を維持するためのカテカテを得る上でも、貨幣を得る上でも、よく生きる上でも、大原則としてこれらは一人の力では成し遂げられないからだ。だからこそ、人は社会との間の相互作用の中に存在し、規律構造である世間体の中で生きることになる。

たとえば過度なナルシスト（ナルシシスト）、つまり病的に自己愛の強い人は、自分を支えるために絶えず自分に対する周囲からの称賛を必要とする。

なぜそのようなことになるのかといえ、ナルシストは日常的に自分自身に自信がないからだ。自分に自信がないので、人間

関係の中で周囲を巻き込み、常に称賛を得なければ生きていくことが難しい。これに対して比較的自分に自信のある人は、自己の中で良し悪しを決めることができるなど、ある程度、自己の内部で自己完結ができています。だから、周囲からの称賛をいわずらに求めることはしない。

これと同じことが世間体と個人の関係にもいえる。自分の中に確固とした自己像があり、自分を信頼していれば、周りのことなど本来ならどうでもよいはずだ。しかし内面が空虚である人は、自分を存立させる、その基盤を世間体に置く比重が大きく、そのことによって⁽²⁾絶えず世間体を気にしながら生きていくことになる。

「他人の目が気になる」とはまさにこの状態を指す。もちろん、そうでない人も多くいるが、多くの日本人はこの点において世間体に価値を置きすぎている。

そのように内面化された世間体がよく発露される場合には、治安や公衆衛生の良好さとして、また「人当たりの良さ」といった面で示されることになる。

B、世間体が悪しき面を示す時に、それが内に向かえば自己蔑視になり、最悪は自死をマネク⁽¹⁾ことにもなりかねない。また外に向かえば、世間体をもとに他者を過剰に裁く攻撃性が発揮されることになる。空虚であるがゆえに内面化され、価値を過度に置かれた世間体は、往々にして後者において発現することが多い。⁽³⁾ここに、内面化の恐ろしさがある。

人間と動物を分かつものは何だろうか。その大きな要素の一つは、言語、つまり言葉と文字を操ることができるか否かにある。そしてそれは、個人と個人の間、そして社会と個人との間のコミュニケーションで欠くことのできないものになっているのはいうまでもない。普段、多くの人はこの言語について、あまり気にすることなく使っていることだろう。

もちろん言葉は、「山」「リンゴ」「自動車」といったように具体的な物品を単語として置き換えて会話や文章の中でやりとりし、それを共有することができるが、より言語が人間を人間たらしめるのは、抽象的な概念を言葉にできるといふ点にある。

C 「愛」「希望」といったものは、具体的な物体として存在しないが、人間が人間らしく生きる上においては、とても重要

なものだ。こうした抽象的な概念を時に崇高なものとして共有できるのは、科学的に立証できる範囲において、地球上に現在は人類（現生人類）しかない。

もつといえ、たとえ「山」「リンゴ」といった物体について指し示す単語においても、それは実際に存在する山やリンゴとは違う。

仮に100人の人がいたとして、「山」を思い浮かべてもらおうとしよう。その想起する「山」は、100人が100人とも違うイメージを持っている。ある人は、富士山を思い浮かべるかもしれない。別の人は、北アルプスの山脈や北海道の大雪山を思い浮かべるかもしれない。そして「富士山」を何人かが思い浮かべたとしても、それぞれの「富士山」はすべて細部や色などが違ってはいるはずである。

これが示すのは、人間は本質的に他者との間で作り出したフィクションの中に生きているということだ。だからこそ、人は文学や芸術という魅力的なフィクションを欲するともいえる。小説や映画といった創作としての物語と現実社会はもちろん違う。しかし、物事を言語として置き換え、それを共有するという意味において、それらはいずれも人々が相互に作り出したフィクションなのだ。

人と人とがコミュニケーションを取る時、短い会話の中でも、固有名詞や名詞、形容詞や動詞など、さまざまな性質の言葉を組み合わせる意味のある文章としてやりとりする。それ自体が、実体のない、手に触れることのできない「概念」を常に共有していることになる。

これは「民主主義」といった政治理念や法律などの現実の社会の中にある、さまざまな概念や決まり事についてもそうだ。なぜなら「民主主義」や「刑法」などという物体は存在しないからだ。だが、重要なものであるのはいうまでもないだろう。人は、そうした概念を「存在するもの」「こういったもの」といった規定と約束事の上にコミュニケーションを取っている。

「人間はフィクションの中に生きている」という文脈で語る時に、もう一つ大きな意味がある。それは、そうした「X」の

「楼阁」ともいうべきコミュニケーションの中に生きる時に、人は「自分は他者（あるいは集団）との関係性において、どのような位置にあるのか」を常に意識と無意識の中で感じながら過ごしているということだ。

つまり人は普段、「この人は、社会的に『上（の立場の人）なのか』『下（の立場の人）なのか』『同等（の立場の人）なのか』『これは言ってもいい言い回しだろうか、言ってはいけない言い回しだろうか』といった、自分の社会的なポジションと役割をもとに言動を取っている（あるいは取らないでいる）。

⁽⁵⁾ここに、世間体が介在する。

世間体も同様にフィクションである。人は、概念が複雑に積み上がって紡ぎ出されるソウダイ（ウ）かつ生き物のように蠢うごめく文明というフィクションの中において、誰しもが役者として何かしらの役割を演じている。それは「夫・妻」「親・子ども」「上司・部下」「教師・生徒」「友人・恋人」といった比較的明確に規定し得るものに留まらない。たとえ一人でも社会の中で常に規定される。その場で、対面する他者との関係性や相互作用の中でダイナミックかつリアルタイムに生み出されるものだ。

そして各人が、他者や社会との関係性の中で、許容される範囲で言動を行うのが社会性のある人の在り方である。その許容される範囲を決定づけるのは、社会そのものであり、他ならぬ世間体なのだ。人間が人間である限り、この世間体というフィクションとともに生きざるを得ない。つまり、その限りにおいて人間は世間体の **Y** といえる。

（犬飼裕一『世間体国家・日本 その構造と呪縛』による。）

問1

傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、
15
と
17

(配点6点)

(ア) カテ

15

- ① 彼はヨウリヨウがいい人だ。
- ② 会社のドクシンリヨウに住む。
- ③ 相手のリキリヨウを見る。
- ④ リヨウジュウで害獣を撃つ。
- ⑤ 日でりが続いてシヨクリヨウ難が起きる。

(イ) マネク

16

- ① 私がフシヨウの弟子です。
- ② 急な知らせにシヨウゲキが走る。
- ③ オリンピックをシヨウチする。
- ④ ここは文明ハツシヨウの地といわれる。
- ⑤ 舞台にシヨウメイを当てる。

(ウ) ソウダイ

17

- ① 出家してソウリヨになる。
- ② ユウソウな武者行列を見物する。
- ③ うまくいって気分ソウカイだ。
- ④ ソウギを仏式で執り行う。
- ⑤ 友人はベツソウを所有している。

問2

空欄

A

く

C

を補うのに最も適当なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、A 、B 、C 。
(配点6点)

- ① 一方で
- ② しかも
- ③ たとえば
- ④ なぜなら
- ⑤ つまり
- ⑥ とりわけ
- ⑦ あるいは
- ⑧ むしろ

問3

空欄

X

解答番号は、

21

22

Y

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(配点6点)

X

21

- ① 物語
- ② 思考
- ③ 人生
- ④ 文脈
- ⑤ 概念

Y

22

- ① 恩恵に浴している
- ② 呪縛からは逃れられない
- ③ 幻影に脅えている
- ④ 概念の一つに過ぎない
- ⑤ 恐ろしさを理解していない

問4

傍線部(1)「ここに、人間性が大きく表れることになる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、23。

(配点5点)

- ① 社会の中での人それぞれの在り方は、その人が社会にどのような価値をもたらすかによって決まるということ。
- ② 生命の維持が容易となった現代社会には、嗜好品や贅沢品、貨幣に価値を置く人ばかりになってきているということ。
- ③ 人は社会の中で生きるようになったことで、その人がどのような価値を持つ人間なのかが問われているということ。
- ④ 社会の中で生きる人としての在り方は、その人が価値をどこに置くかによってそれぞれ決まってくるということ。
- ⑤ 人は、本能の部分である生命の維持ができた次の段階として、自分が生きている社会を意識し始めるということ。

問5

傍線部②「絶えず世間体を気にしながら生きていくことになる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

24。

(配点5点)

- ① 自分自身に対する信頼が薄い人は、社会生活を営む中で出会った他者に依存して自身の判断や思考をゆだねてしまうことで、自分の存在を他者の思惑に従属させてしまうということ。
- ② 日頃から自分自身に自信を持って生きている人は、周囲の人間関係の中でいつも他人からの称賛があり、そこに自分の存在価値を確認することで持続的に自信を持ちながら生きていくということ。
- ③ 自分の中に確かな価値基準や自己像がない人は、社会との関わりの中で生きるうちに世間体に価値を見出し、自らの拠り所とすることで世間体という規律構造の中で生きていくということ。
- ④ 自分の中に確固たる自己像や善悪の基準がない人は、社会の中で見失いがちな自分の存在意義を周囲の人間関係のみに求め周囲の評価を世間体として案じて生きていくということ。
- ⑤ 自分の心の中に虚しさを抱えている人は、社会生活を営む中で世間体に関心を見出し、規律構造である世間体を保つことを生きがいにすることで充実した人生を送っていくということ。

問6

傍線部③「ここに、内面化の恐ろしさがある」とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次の①～

⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

25。

(配点5点)

- ① 日本には世間体を根拠として自他に対して過度な攻撃を行う場合がしばしばあるところに、世間体が日本社会の深層に根づいていることの恐ろしさがあるということ。
- ② 日本では世間体を気にして自分自身をせめる人もいるが、逆に他者に過剰な制裁を加える攻撃性を持っている人々も数多く存在しているという怖さがあるということ。
- ③ 日本では世間体をもとに他者に過剰な攻撃を加える人々が多く存在するところに、現代社会の中で内面が空虚な人々が増えていくことの恐ろしさがあるということ。
- ④ 日本は世間体を保つために他者に人当たりの良さを見せる人がいると同時に、世間体を盾に他者を過剰に裁く攻撃性を持つ人もいるという二面性があるということ。
- ⑤ 日本では世間体を根拠に自己にも他者にも過剰に攻撃を加える場合が多々あるところに、内面が空虚であるがゆえに世間体を自らの価値とすることの怖さがあるということ。

問7

傍線部(4)「人間は本質的に他者との間で作り出したフィクションの中に生きている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、26。(配点5点)

- ① 人間は身の周りがあるさまざまな物事を言語に置き換えることで、他者との間で互いの言葉をやりとりすることができるようになるということ。
- ② 人間は現実社会のさまざまな物事を言語に置き換えることで、他者との間で互いに実体のない抽象的な概念を常に共有して生きていくということ。
- ③ 人間は現実社会に存在するあらゆる物事を言語に置き換えながら、自分が言語によって創作した物語を他者に共有してもらい生きていくということ。
- ④ 人間は具体的な物体の名前を口にする時にその物体のイメージを心に描くが、同じ言葉であってもそのイメージは各自で異なっているということ。
- ⑤ 人間は現実社会にある具体的な物体を抽象的な概念に置き換えることで、常に他者との間で互いに概念を共有しながら生きていくということ。

問8

傍線部(5)「ここに、世間体が介在する」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、27。(配点6点)

- ① 人が他者との関わりの中で自分の社会的な位置づけと役割をもとに言動を行う時に、日本ではすべての人々に対して世間体を保つよう社会的な圧力がかかるということ。
- ② 人が日常的に他者と自分との関係性を考えながら言動を決める際に、世間体として自分の社会的な立ち位置が相手より上か下かをいつも考える必要があるということ。
- ③ 人が他者との関係性において自分の社会的な位置づけと役割をもとに言動を行う際に、世間体が決定づける許容範囲の中で言動を行う人が社会性のある人とみなされるということ。
- ④ 人が他者と関わる中で自分の社会的な立ち位置や役割をもとに言動を行う際、世間体という社会の規律によってみな同じ役割を規定されてしまうということ。
- ⑤ 人が普段から対面する他者に対して自分が取るべき言動を決める時に、相手がその時の自分の言葉や行動を許容してくれるかどうかを常に考える必要があるということ。

問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

28。

(配点6点)

- ① 貨幣や贅沢品を重んじるよりも、健全な家庭生活や社会貢献活動を重んじることが、価値ある生き方である。
- ② 人は言語で他者とコミュニケーションを行う際、相手と自分が概念を共有しているかを常に確かめる必要がある。
- ③ 現実社会における政治理念や法律などの重要な概念や決まり事は、言語に表すことで具体的な物事として存在する。
- ④ 社会に生きる人々は、対面する他者との関わりの中で、その時と場に応じて自らの役割やポジションが規定される。
- ⑤ 世間体は言語と同様、世間について人それぞれが全く異なるイメージを持っているというフィクションである。